

四月は特に楽しい雰囲気と厳しい雰囲気のメリハリを

大阪教育サークルはやし 宮本哲

「当たり前ではない」

昨年度、全国のほとんどの学校が新型コロナウイルスのために三月二日から休校になったのではないのでしょうか。私は五年生の担任だったのですが、インフルエンザのため二日間の学級閉鎖をしている間に阿部首相から休校の要請があり、クラス全員が集まることなく、さびしい気持ちを残したまま、学期末を終えてしまいました。子どもたちが登校してくるのが当たり前だと思っていました。しかし、それは当たり前ではないことを改めて感じさせられました。だから、当たり前を当たり前と思わず、一日一日、大切にしなければならぬと強く思いました。この気持ちを四月からの学級作りにつなげていきたいと思っています。

「春休み中の学級作り」

春休み中によっておくこととして教室の掃除や教材研究、テストやドリルなどの教

材採択など様々なことがあります。学級作りとしてやっておいたらいいのが、子どもの名前を覚えることです。初対面なのに、自分の名前を呼ばれたら誰でも驚き、嬉しいものです。今年の先生は、ちょっと期待できるかも、と思ってもらえればラッキーです。そういったことが積み重なって子どもたちとの信頼が構築されていきます。

名前の覚え方として私は、まず、名簿順に覚えます。だから子どもたちの席順も名簿順に並べておきます。そうすれば、顔を見ながら、名前を呼ぶことができます。さらに時間があれば、かけ算の九九と同じように逆から言える、ランダムに言えるようになっていくことが望ましいです。

「ミニゲームで学級作り」

新しいクラスになった時、子どもたちは、友だちできるかな、どんな先生かな、など期待と不安が入り混じった状態です。

そして子どもたちは、先生の言葉や行動をよく観察しています。この人は、信頼できる先生なのか見定めています。

まずは、先生という子どもにも認めさせる必要があります。そのためには子どもたちに気に入られなければなりません。

子どもたちは、ゲームが大好きです。だから、四月は他の月より多くゲームを行います。そして楽しい雰囲気を作っていきます。そうすると、子どもたちは楽しい雰囲気を作ってくれる先生を認めるようになっていきます。ゲームといっても一時間の授業をすべて使うわけではなく短い時間（一〇十分程度）のミニゲームを何度かしていけばいいのです。

ゲームをすることで子どもたちは、教師とつながるだけでなく子ども同士もつながっていきます。さらにゲームをするためには教師の指示をしっかり聞かないと楽しくゲームをすることができません。だから子どもたちは主体的に聞く習慣がついてきます。そしてゲームの中でルールを守らないと楽しくないことを学び、ルールを守る大切さを実感していきます。ここでいくつか

のゲームを紹介します。

「〇〇ウォッチング」

このゲームは、誰かの言動をよく見るとい
うというゲームです。

はじめは先生と子どもたちをつながるた
めに私の言動をよく見ることを仕掛けます。

例えば、右手の服の袖だけをまくしあげ
て教室に入り、子どもたちの前に立ちます。
そして「おかしなところないですか？」と
聞きます。すると子どもたちは、笑顔にな
りながら、すぐに答えを言ってくれます。
次の日も同じようなことをします。左手の
服の袖をまくしあげたり、右足のズボンの
すそをまくしあげたりします。他にも後ろ
向きで教室に入ったり、スキップで教室に
入ったりします。少しずつ変えるだけで、
子どもたちは、楽しみながら先生をよく見
るようになります。

次に子ども同士をつなげていきます。ま
ず、教師が一人の子の良い所を見つけます。
(はじめは、今まで悪いことをして先生に
よく怒られていた子の方がいいと思いま
す。)次の日の朝、その良かったところをク
イズに出します。「昼休みにトイレのス

リップを自分の使ったものだけでなく全部
きれいに揃えていた人がいます。誰でしょ
う。」と聞きます。正解が出たら全員でその
子に大きな拍手を送ります。

そういうことを何日か続けていると、子
どもから、「〇〇ちゃんがこんな良いこと
(よい言葉使い)していたよ。」ということ
を言ってきたり、一日の振り返りのノート
に書いてきたりします。今度はそれを使っ
て、子どもに私と同じようにクイズを出題
させます。終わりの会の時に、一日三人ま
でと決めて発表させると、いい雰囲気です。
「さ
ようなら」ができます。

「二十の扉」

このゲームは、先生が頭の中に思い浮か
べたものを当てるゲームです。先生は子ど
もたちの質問に「はい」「いいえ」でしか答
えません。そして、二十の質問が終わった
時に子どもたちの答えが全員一致していた
ら子どもたちの勝ちとなります。このゲー
ムは、質問する力がつくと同時に先生の答
えや友だちの答えをしつかり聞くといい力
もつきます。友だちの質問をしつかり聞い
ていないと、同じ質問をしてしまうことが

あります。毎年はじめのうちは、何人かし
ます。さらに、途中から答えが思い浮かん
でいる子と思い浮かんでいない子がいる状
態になります。思い浮かんでいる子は、思
い浮かんでいない子に何とかヒントになる
ような質問を考えます。全員で答えを一つ
にするこの難しさを体験するとともに仲
間のことを考えることも体験できます。

「厳しい雰囲気で学級作り」

厳しいといっても、いつも怒鳴ったり、
叱ったりしているわけではありません。集
団生活をしていく中で当たり前のことがで
きていなければ、毅然とした対応をしてい
きます。

- ・あいさつは、自分から大きな声で言う。
- ・朝学習は、黙って時間通りに始める。
- ・教室移動なら黙って三十秒以内に並ぶ。

(並ぶ時間は、子どもの実態によって変え
ていきます。)

- ・給食の用意は、十五分以内にする。

- ・掃除は黙ってする。

できていなければ、やり直しや注意を何度
もします。できていれば誉めます。この繰
り返しが楽しい学級作りには欠かせません。

4本の柱を意識して、学級の土台作り

加印学力研 いろえんぴつ 井上 佳和

学級の土台作り

私は、4本の柱を意識して学級づくりをしています。

- ①ルール・規律づくり
- ②関係づくり
- ③意欲づくり
- ④授業づくり

ルール・規律づくり

集団にルールや枠があることで、子どもたちは安心して自分らしさを発揮します。学級のルールを教師が示し、子どもたちがそれを守ることがスタートです。後の学期になってから、ルールの是非やルールの範囲を子どもたちに考えさせることで、自主的・自治的活動になっていきます。逆にルールがあやふやなままで、後で厳しくすることは危険です。子どもたちに不満がたまり、教師との関係も悪化します。

4月は、当番などのシステムを明確にすることに加え、「聞く」「姿勢」「くつ箱にくつを丁寧に入れる」を重視します。当り前のことを当たり前にすることを徹底します。

4月の子どもたちは、前のクラスのルールで行おうとします。また、担任の力量を測ろうとして、自分たちに有利になるように主張します。どうしてもルールが曖昧になりがちです。それを防ぐために、担任が「このクラスのルール」を明示します。曖昧になりそうなときは、その場で決定し、全員に示し、共通理解していきます。お勧めの方法は、黒板の端に決まったルールを書くことです。これで、その場の約束で終わらないしっかりとしたルールになります。守れるようになったら消していきます。

関係作り

関係づくりは、①「子ども同士の関係づ

くり」と、②「教師と子どもとの関係づくり」があります。

「子ども同士の関係づくり」は、4月のうちに男女関係や今までの友だち関係乗り越えさせ、新しい関係づくりのきっかけを作る必要があります。この時期を逃すと、後々、学級経営や授業に大きな影響が出てきます。まずは、「だれとでも、ある程度話せる関係」を目指します。

「子ども同士の関係」を作るための第一歩は、ひたすらへアで活動させることです。1時間に5回開かせると、一日25回です。それが、10日もあれば250回です。次の席替えまでに、新しい関係が出来上がっています。私は隣同士でハイタッチをしてから話し合いをさせます。話し合いの終了も拍手とハイタッチです。6年生でも、隣が異性でもします。初めは恥ずかしがりますが、ここを乗り越えると男女が仲良くなります。ポイントは授業中での関わりであることです。休み時間の自発的な関係づくりはどうしても、スクールカーストやグループの固定が強固になります。授業でならその壁を乗り越えることができます。

次に「教師と子どもの関係づくり」です。

「子どもの伸びる要因」のうち30%が「学び手と教え手の関係」だそうです。教え方の技術やピグマリオン効果よりも高いそうです。担任は、厳しいだけ、優しいだけでは全員から信頼を勝ち取ることはできません。ボスびるようになるためには、毅然とした少し離れた距離と、安心できる近い距離を持たなくてはなりません。私はルールに厳しいタイプの教師ですので、意識的に子どもたちに関わって行きます。

「教師と子どもの関係づくり」の方法は、決められたルールを徹底することが一つ。もう一つは、毎日全員と関わることです。朝がチャンスです。毎朝、始業までに机間巡視をします。教室に入ってきた児童にどんだん声をかけていきます。さらに、指導の仕方です。指導中に「あなたの考えを聞こう」と言って、子どもに話させます。今まで怒られてばかりの児童は、間違った考え方をしていますが、その子なりの考えをもっています。初めに、聞こうとする態度を示すことで、その子は納得して注意を受けるようになります。

意欲作り

意欲とは、「伸びようとする」気持ちです。そのために、昨日の自分よりもたとえ、1ミリ、1秒、1回でも伸びるようと伝え続けます。私は、4月に2つの取り組みを使って意欲づくりをします。

1つ目は、「リズム漢字」です。始業式の日に渡して置き、一度教師が範読しておきます。次の日、少し余裕が出るので連れ読みなどをして読ませていきます。三日目あたりから本格的に、先生と子ども、男女・生活班などで交代読みをして、何度も読んでいきます。すると子どもたちは読むことが楽しくなっています。ある程度読めるようになると、息を吸うことや口形の指導ができ、より上手な音読になり子どもたちは自分の伸びを感じてきます。一週間もたてば、暗唱をしてくる児童が出てきます。さらに意欲に火がついていきます。

もう一つは、「100マス計算」です。まず10マス計算から始めます。10マスごとに、10秒で行い、数題行います。次の日は、50マス計算で、その後100マスを行います。記録を必ずとり、伸びを確

かめていきます。スタートの前に必ず、「昨日の自分に勝つ！」とみんなで言うてから

すると、一体感も湧きます。100マス計算を4月にする理由はもう一つあります。それは、学習規律を浸透させるためです。教師の合図で全員が動き、シーンとした中で勉強が行われる経験ができるのも100マスの良さです。

授業作り

授業は、それぞれの先生のやり方があるので、自分のスタイルの基礎を徹底するとよいと思います。

私が4月中にするのは、必ず意見を作らせることです。そして、書いたことを発表させることです。

それと、ノートの基本を教えています。日付、題名、目当て、色の使い方などです。子どもによつては、板書をノートに写す必要を感じていない子もいます。板書を書き写すことはあたりまえだということを押し付けておきます。

ふり返り、自分の意見などは、時間内は書き続けることを求めます。

よりよい学級づくりのために4月にできること

|| 徹底的に音読 ||

加印いろえんぴつ 岸本 ひとみ

この広場を手にかけているのは、新学期が始まって、2回目の週末でしょうか。1週目は、前学年との引継ぎ、子どもの名前と特徴をつかみ、学級びらき&授業びらき。2週目は、実態調査をして、弱点補強の方針を立てる。

○リセット感を大切に

4月は、子どもたちはとても張り切っています。前学年でうまくいかなかったことがあっても、

「今年こそ!」

と考えて、新しいクラスに入ってきています。最近では、2年連続のクラスというのが少なくなってきましたから、担任も、メンバーも多少なりとも入れ替えがあるのが普通です。

その中で、

「やるぞ!」

と構えてくれているのですから、それを大事にしない手はありません。

音読は、リセットにもつてこいの題材です。何しろ、国語の時間は毎日あるのですから、毎日、音読練習ができます。極端ですが、4月の国語の時間は半分ぐらい音読練習に充ててもかまわないと思います。

もちろん、連れ読み、交代読み、一文読み、などを駆使して、変化のある繰り返しで、飽きない工夫をすることが前提になります。毎日音読して、上手になってくると、

「今年は去年と違う自分になるぞ。」
という気持ちを持続させることができます。

○全員参加できる

音読練習のいいところは、毎日、全員が参加できるところです。国語の教科書、音読集、楽しい詩、お気に入りの詩、いろいろ

る取り組むことができます。

高学年だと、流行りの曲の歌詞を音読してみるのもおもしろいですよ。子どもたちの好きな楽曲というのは、なにがしか心をとらえる部分があつて、共感できることが多いです。「君の名は。」が流行った年は、RADWIMPSの「前前世」の歌詞を音読してみました。野田洋二郎さんの歌詞はなかなかいいですよ。

また、

「恋すちよう 我が名はまだき 立ちにけり 人知れずこそ 思いそめしか」

という、私の好きな百人一首の恋の歌を紹介したときは大盛り上がりでした。

中学年は、やはり、工藤直子さんの「のはらうた」でしょう。かまきりりゅうじの「おれはかまきり」で、

「おう 夏だぜ。」

を始めるとノリノリです。発展として、合唱組曲もあるので、音楽発表会もできます。

四年生は「かつとばせ 都道府県」に4月から取り組めば、派生して楽しい地図遊びが自然発生的に始まっていきます。



2年生は、教科書の音読が一番です。教科書以外の題材を取り上げると、練習量が足りなくて、たどたどしいまま終わってしまうこともあるからです。「ふきのとう」の詩の次は、「たんぼのちえ」を正確に、自信を持って音読できるように、練習していくことが大事です。

○発声は基本中の基本

最近では、声を出すことに対して、別の意義があると感じています。幼児期に大きな声を出す経験がない子どもがけっこういう

のです。その逆に、大声だけを出して、ささやき声が出せない子どももいます。ボリュームの調整ができていないのです。中でも、かぼそい声しか出せない子どもはとても心配です。たいていの場合、なかなか自己開示や自己表現ができず、意思表示がはっきりしないので、指導する側が気をつけて見ていないと、一日中黙ったまま下校してしまうのです。

保護者が夜勤のある場合、昼間に大きな声を出したり、騒いだりすると叱られた経験がある子どももいます。もつと極端な例では、いわゆるネグレクトで、泣いても叫んでも誰も反応してくれなかったために、しゃべらなくなってしまうという子どももいます。学級づくりという点でも、意思表示ができないままだと、「いやだ。」とさえず、下手をするといじめの標的になってしまうのが、とても心配なのです。

音読だと、自分の意見を話すわけではなく、考えて発表する必要もありません。大きな声で、書いてあることを読んでいくだけです。かぼそい声の子どもにとっても、抵抗感が少なくすみませす。毎日、音

読練習の時間を設定していると、必ず、かぼそい声の子どもも、自分のパートは声を出しています。隣に、大きな声の元気がいいやんちゃ坊主を置いて、いっしょに声を出させると、連られてだんだん声が大きくなってきたりもします。

逆に大きな声しか出せない子どもには、ささやき声、少人数の声などの練習が必要なので、それも音読練習の中で少しずつ取り組むことができます。

○張りのある声のクラスに

ただ、元気で大きな声が出せるだけでなく、歯切れのいい、張りのある声で音読ができるクラスは、いろいろな学習活動に積極的に取り組むことができる傾向があります。ひとりひとりの自己表現の場が保障されているということではないかと考えています。国語だけでなく、算数も、社会科も、理科も道徳も、英語も、音読練習の時間と考えると、毎日取り組めば、1か月後には、きつと張りのある声のクラスになると思います。

期待のない不安はないし、不安のない期待はない

〜期待100不安100の4月〜 丸小野 聡暢

4月は自身自身に期待する

何の根拠もありませんが、4月の自分自身には「何かできそう」「今年こそは変わろう」と期待する自分がいません。これは先生方だけではなく、子どもたちも同じ気持ちだと思えます。4月はこの気持ちを利用して学級づくりを進めると上手くいきません。よく、前年荒れていたというクラスが4月になった途端上手く行くということがあると思えます。これは子どもたちが変わったという気持ちと新しい担任の指導がマッチするわけです。

という僕自身も学級づくりに関しては言語化できていないことが多く、経験や感覚でやっている部分があります。独特なセオリーや一般化できないことも出てきて、ちぐはぐな文章になるかも知れませんが、一つでも先生方の4月からの学級づくりのヒントになれば幸いです。

教師主体の学級づくり

先生方は学級を持つ時に1年後の子どもたちの姿として「自主的・主体的に学ぶ集団」や「自治的な集団」を目標の1つに掲げる方は多いのではないのでしょうか。では、どのようなクラスが主体的かと言えば学級王国と言われる集団です。学級王国と言われるとみなさんは良いイメージを持たれないと思えます。「先生主体」「先生の自己満足的な学級経営」という悪しきイメージがパツと思いつかぶからだと思います。しかし、そのようなクラスがうまくいっていることが多いのが現実です。ウイキペディアで「学級王国」の言葉を調べたら「子供の自主性と主体性が前提とされており、学級においての学級会、係、班による集団的な自治が基本とされていること」と書かれています。この姿こそがみなさんが求めている集団ではないでしょうか。

しかし、主体性というものは子どもたちが自ら発揮できるわけではありません。主体性と言う言葉から子どもがしたいことを自由にさせる先生がいますが、これでは失敗します。実は逆で、子どもたちは、判断基準が明確で限定されている中の方が自由度は増していきます。主体性を引き出すために、4月は教師主導で学習や生活のルールを教え1学期の間に徹底していくことが大切です。しっかりと管理された集団が主体的で自治的な集団へと変わる第一歩です。ただ、いつまでも教師の指導性が強いままいると子どもたちが主体的になっていきませんので、子どもたちの教師への依存性から自分たちの有能感を高めていくことにシフトしていかなければいけません。

4月は本当にクラスが壊れているのか

SNS映えを気にする先生方はクラスを立て直した経過を覚えてもらうために、4月に大変なクラスを持ったと言われる方が多いですが、本当にそうでしょうか。(実際に大変なクラスもあると思いますが…) 昨年まで違うクラスの子どもたちが集まるわけですから、当然新しい担任の指導に当ては

まっつけないわけです。いくら学年できま
りを決めていてもクラスによつては、徹底
されていなかったり、大切にすることがち
がっていたりしてバラバラなわけです。
ただ、この先生方は子どもたちの主体性の
引き出し方を知っています。先生が大切に
している価値観に染め、いち早く自分の指
導の管理下に当てはめた学級王国を作っ
ているのです。

40人を一斉に指導する力

そもそも教師の本当は何でしょうか。最
近はこの学校でもそうだと思いますが、
個に応じた指導が求められます。しかし、
学級は1人の大人と40人の子どもで構成
されています。そこから考えると、教師の
本来の仕事は集団を指導、それも一斉に指
導することではないでしょうか。それこそ
が集団づくり・学級づくりのはずです。も
ちろん「個」は大切ですが、集団指導につ
いてこれられない子どもに初めて個別指導が
必要になります。しかし、最近逆になっ
ている気がします。個別が先で集団が後。
だから、集団づくりが難しくなっているの
ではないでしょうか。集団の中で個を育て

ていかなければいけません。気をつけなけ
ればいけないことは、クラスをまとめよう
とするとお互いしんどくなります。まとめ
るといふことはその枠組みからはみ出る子
がいるからです。学級づくりは子ども一人
一人の力を伸ばす環境設定の場と考え、同
じ教室で同じ課題に取り組み、お互いに励
まし合ったり刺激し合ったりしながら成長
していく共同を大切にしていきましょう。

一貫性を守るためのマイナーチェンジ

先生方は真面目な方が多く、一度決めた
ルールはなかなか曲げられないと思います。
また、一度きまりを破ると禁止ルールをど
んどん追加してお互いを締め付けていませ
んか。でも、それはやめましょう。上手く
いかなければ、クラスの子どもたちの様子
に合わせて辞めたり微調整をしながら変え
たりする勇気が必要です。

授業開きを大切に

黄金の3日間や30日と言われますが、
やはり初日が肝心です。子どもたちは「今
年はどんな先生だろう」という思いで教室
にいるはず。もちろん言葉で先生の思
いを伝えることも大切ですが、授業をする

ことで、授業に力を入れる先生だというメ
ッセージを伝えるべきです。僕は毎年、国
語で授業開きをし、ノート指導を行います。
ノート指導は板書を写させることではあり
ません。ノートを通して子どもを変えらるこ
とです。「1行目の上から2センチくらいあ
けて、ノートの取り方って書いてね」「次は、
1行開けて題名を書くよ。題字は大きいか
ら2行を使って書いてね」などと具体的な
指示を出しながらノートをとらせていきま

す。こうしていくと、子どもたちは、先生
の指示に従えば美しいノートができるとい
う教師への信頼感と自分もできるんだとい
う自己肯定感を感じるわけです。帰宅後は
保護者から「今年の先生はどんな人だった」
と聞かれれば、自信満々にノートを見せな
がら「こんな授業をする先生だよ」と会話
が弾み、教師に対する保護者からの信頼も
得ることができます。

4月は詰め過ぎてしまうことが多いです
が、学級開きの方法論を取り入れるのでは
なく、教師の哲学を持ち、それに当てはま
る実践を1つずつ取り入れていくといいの
ではないでしょうか。

学級づくり 私の「はじめの一步」

春日井学力研 堀井 克也

一日一日を、本当に大切にしたい

この度の一斉休校があつたことで、今年度のスタートをこれまでとはかなり違った思いで迎えています。

それは、「子どもたちが学校へ通ってくること、毎日授業ができることは当たり前ではない」と知つたからです。本来ならば子どもたちと過ごせたはずの十五日間、「みんなに会いたいなあ。」「授業がしたいなあ。」と、そればかりを考えながら過ごしました。一年間で約二百日、という大前提が崩れる経験をしたことで、だからこそ一日一日をもっと大切にしていかなければならないと考えるようになりました。

となれば、四月に良いスタートを切ることは、これまで以上に重要な意味をもつこととなります。自分なりに意識していることは色々ありますが、ポイントをしばつて整理してみたいと思います。

凍々しい雰囲気への第一歩

新しいクラスをうけもつて、子どもたちの前に立つと、キラキラした目でこちらを見ている子どももちろんいますが、背中を曲げ、何となくだらけた雰囲気の子が結構います。こういう子たちを放っておくと、クラス全体の雰囲気がだらけてしまいます。

そこで私は「声を出させること」と「行動のスピードを上げること」の二点を意識して、指導に当たります。

声については、「あいさつ」と「返事」にしばつて意識させ、自分が元気な声であいさつしたり話したりするとともに、よく声の出ている子を褒めます。これまで大きな声を出す経験の無かった子もいますので、声の小さい子を叱ったり責めたりしてはいけません。ただ、少しでも伸びが見られたら、ここぞとばかりに大きさに褒めます。

次にスピードについてです。例えば国語

の授業開きで「教科書の〇ページを開きましょう。」と指示をすると、サツと開く子もいれば、指示されてから教科書を探し始める子もいます。そこで、一旦ストップさせて、再度教科書を閉じて机上に置かせ、「サツと開いてみようか。」と声を掛けてからやり直します。出来たら褒めます。出来なければもう一度……こうしたやり直しを、他にも起立する際や、廊下に並ぶ際などに繰り返していきます。ここでも、叱ったり責めたりはしません。みんなが出来ることを求め、淡々と、出来るまで繰り返させます。すると、サツと行動することが当たり前になってきて、クラスの雰囲気が凍々しいものへと変わっていきます。

さて、このように、声を出させたり、行動のスピードを上げさせたりしていると、「軍隊みたいだ」と仰有る方が時々います。しかし、そのご意見には承服しかねます。というのも、目的が異なるからです。実は子どもたちは、ガラガラとした雰囲気よりも凍々しい雰囲気を好みます。サツと行動することの心地よさに気付くと、言われなくても素早く行動するようになります。子

どもは心地よさの中でこそ思いっきり伸びていくものです。ですので、子どもたちの前に立つ私も、鬼軍曹のような厳しい表情ではなく、いつも笑顔を心掛けています。

子どもとつながる第一歩

さて、クラス全体の雰囲気づくりと並行して取り組まないといけないのが、子ども一人ひとりとの関係づくりです。

というのも、四月の段階では（特に低学年では）、子ども同士を結びつけることよりも、教師と子どもとがしっかりとした信頼関係でつながることが大切だからです。

「この先生は信用できる人だ。」「この先生とだったら自分は一年間で成長できそうだ。」と感じさせることが重要です。

その手だてとして、以前から学級通信を活用してきました。一人ひとりの具体的な姿を写真とともに載せ、価値づけていくのです。出来るだけ色々な子が出てくること、子どもが目を向けにくいようなことに着目することなどを意識して書きます。

ですが、これだけでは不十分に感じて、書き始めたのが「子どもへの手紙」です。私が見つけたその子の良い姿を具体的に認

めるとともに、今後の成長に対する期待を綴って、机の中にこっそり入れておきます。

クラスで最初に先生からの手紙をもらった子の反応を見るのが毎年楽しいのですが、昨年度の二年生の場合、「え…何これ。あ！先生からのお手紙だ！」と大きな声でしゃべってしまったので、あつという間にクラス全体に知れ渡ることになりました。そして、自分にはいつ届くのかと楽しみに待っていました。今年はどうでしょうか。

このような地道な取り組みによって、「この先生は自分の良い面を見てくれる、自分に期待してくれている人なんだ」と、子どもたち一人ひとりが感じられるようになっていきます。

ちなみに、元々学校生活に対して前向きで、学力も高い子の方が反応は良く、いわゆる手のかかる子ほど一筋縄ではいきません。なぜなら、そういう子はこれまで何度も傷付いてきているからです。「どうせ今年も叱られてばかりなんだ。」と挫けてしまっている心を立ち直らせるのは、容易ではありません。百日かける覚悟で取り組みを続けましょう。

真剣にふたつみる

最後に、もしかしたら一番大切にしていくかもしれないことを書きます。それは「ユーマア」です。一日に何度も、子どもと一緒に笑う機会をつくるのです。

例えば私の場合、メガネを上下逆さまにかけたまま大真面目な顔で教室へ入っていたり、わざと教室の前を通り過ぎてからこっそり戻って前の扉から現れたり…ということをします。リアクション芸人の様に、身振り手振りは大げさにします。

四月は少し多めにします。すると、「この先生は面白い人だ」というイメージが定着し、大して面白いことをしたり言ったりしていなくても、子どもがよく笑うようになります。一緒に笑った数だけ、クラスが明るく、楽しい雰囲気になる気がします。

ちなみに私は元々こそ真面目で面白いことなんて言えない人間でしたし、大人相手なら今でもそうです。でも、子どもの前なら、努力してきたので、真剣にふざけることができます。誰かを傷つけないように配慮しつつ、今年もたくさん笑って過ごせるといいな、と思っています。

「よりよい学級づくりのために4月にできること
ステップアップするための土台づくりを意識して」

京都 山田 周司

はじめに 新しい年の始まりは

ちょうど一年前の四月、新しい学級は、何と二十年ぶりの二年生でした。その前の年まで二年連続で、最高学年の六年生を持っていたため、子ども達のイメージは、「六年生の先生」。何もしなければ、恐いイメージだけが先行するスタートとなります。何とか、「低学年の先生」になる必要があります。新しい学級の子ども達に、「優しくても話せそうな楽しい先生」というイメージを持たせることが、私が取り組んだ四月はじめのミッションでした。

とにかくはじめは、「褒めること」を最優先に進めました。と同時に、「叱るとき」はどんな時なのかを、子ども達の前で公言しました。また、授業でのルールを、実際の授業の中で、二年生にも分かるように説明して教えていきました。そして、学力づくりの取組を始め、学習での努力で褒められ

る場面をたくさんつくりました。子ども達は、しつかりと騙されて(笑)、みんな楽しい新年度のスタートを切ることができました。

子どものイメージはつくられたもの

実は、子どもと子どもの関係は、これまでのイメージがじゃましている場合があります。子ども同士の声かけをよく聞いてみると、同じことをやっけていても、特定の子だけが、みんなから厳しく言われたり、その子だけが注意されたりするシーンがあります。その子は、これまでずっと大人から叱られてきたのでしょうか。大人が叱ることによって、「この子は叱られて当然の子ども」というレッテルが付いてしまっているのです。そんな場面に遭遇したときは、すかさず、その子だけが言われるその状況がおかしいと教えます。問題になるのは、その子だからではなく、困った行動のことな

のです。そのことをやっている全ての人が叱られる必要があります。

実は、褒めることも同じような効果があります。教師が褒めることによって、問題のある子だと思っていた子にも、良さがあるのだと気付かせるきっかけになる場合があります。どちらにしても、私たち大人の評価が、周りの子ども達の評価をもつくっていることに私達自身が気付いて、声かけをすることが大切なのです。

「褒めること」で新しい関係を

ところで、「褒める」ということをするために、「できた」ときを見逃さない観察力が必要です。そのことは、偶然に起こることもあります。もちろん、努力した結果としてできたのであれば、それが一番素晴らしい場面なのですが…。

ところが、私達教師は、小さなことや多くの子ができていることは、「できて当然」という考えから、見逃してしまうことがあります。私の場合は、気付いていても、「うん、うん。」と心の中で喜んでいることがありました。結果として、表現されないこの場面は、「褒める」ことにはつながりません。

その子の新しい原動力になったり、周りの子どもたちの視野を広げたりすることに発展していかないのです。

四月当初は特に、子どもの様子に目を向け、小さなことでも褒めていきます。小さかろうが偶然であろうが、褒められることに嫌気をさす子どもはいませんから。

「叱る」基準を公言する

いくら褒めることが大切でも、子ども達を叱る場面がない訳ではありません。逆に何も考えないで叱っていると、いろいろな場面で叱ることになります。目についたことを叱ることによって、改善を図らせるといふ気持ちは、私たち大人に必ず出てきてしまうものだとも言えるでしょう。

だからこそ、四月の時点で「叱る基準」を約束してしまうのです。公言すれば、子どもとの約束を守るために、事細かなことを言わなくても済みます。私は、以下の三点に絞って子ども達と約束をします。

- 何度も同じことを注意されるととき
 - いじめをしたとき
 - 命に関わるものが起こるとき
- 「これ以外で先生が君たちを叱ることはあ

りません。でも、叱るときは全力で叱りません。叱られたら、怖いよ。」

と言えば、子ども達は逆に安心し、こちら側にとつては、しほりになります。

学習規律の初歩を

学習規律の整った学級は、授業をしていて、私達だけでなく、子ども達にとつても大変過ごしやすい環境をつくり出します。ただし、学習規律は、四月段階で全てできってしまうものではありません。学習規律は、徐々にレベルアップしていくものなので、はじめから高いレベルをめざしても、闇雲に厳しくなるだけで、肝心な成果を確認し合うことにつながりません。四月は、初歩的な学習規律を、さかのぼって確認し、褒めることから始めていきましょう。

【四月当初の学習規律 指導例】

手のあげ方：指先まで伸ばして挙手する。

耳の横に手を付けて。挙手していることがはっきりと分かって助かる。

発言の仕方：当たったら返事をして立つ。

椅子を直さず、素早く発言に入る。発言が終わってから、

さつと座る。次々と発言が続いて、気持ちが良い。

離席のとき：どうしても離席する必要があるときは、そのことを、手を挙げて告げてから。誰もが立ち出すと、理由があつても授業が中断するから。

音読の仕方：句読点で息を吸って、気持ちの良い声を心がける。

実際の授業の中で、これらの初歩的な学習規律を確認しながら、授業中の当たり前をつくっていきます。ここでも、「できた」を「褒めて」、「いつでもできる」に変えていきます。ですから、授業の進度は、決して予定通りにいきません。授業時間のほとんどを学習規律の確認に使うのですから。それでも、ここでのお互いの確認事項が、先々の授業での姿や、その後、レベルアップをしていく土台になるのです。

おわりに 段階論のスタート

四月は気持ち切り換わるとき。そのときを利用して、一緒にステップアップしていくスタートを切りましょう。誰もが気持ちのいい学級をめざして。

「意欲格差」に負けない！公立小学校へ

事務局長 岡本 美穂

◆履修主義に拍車がかかる。

先日JICAの研修で海外の先生方が私のクラスに訪問に來られました。この取り組みも3年目を迎えます。最初の年は「計算しているところを見に来る？」どんな意味があるのだろうか、と疑心暗鬼になったものです。しかし、今はこの取り組みこそ、学力研三十年の成果だとわかります。企画された小河さんからこのようなメールを頂きました。

「どの子ども伸ばす」

始めにおっしゃられた「この基本精神」というか哲学がこの実践の柱になっているのです。学力研の神髄ですね。

そのことがどの子ども置き去りにされることがない状態を作っている。

そのことが誰も彼も、安心して生活できる世界を作っている、このクラスにいることと自身が安心の空気を醸し出している。お互いがお互いを認め合い、友情をばぐくん

ている。

と「どんな安心できる世界、そのことがどの子ども全面的な発達の空間を作り出している。」

参観してもらったのは算数の基礎計算の取り組みだけです。その短時間でも明確な「見る視点」、「ねらい」を持つておられたので私が一年間大事にしてきたことが伝わったでしょう。発展途上国と言われる国の先生方が参加されていた研修でしたが、その先生方全員がおっしゃっておられたのは、私たちの国では「みんなができる」なんてことを考えている先生方は、全くおられないということでした。その理由は一つ、

「落第」制度があるからだそうです。できなかったら進級できない、ただそれだけ。

つまり自己責任を求められています。だから教師は授業をきっちり行うけれど、結果はその子ども次第ということなんです。そんな先生方も子どもの可能性、子どもの輝きに

は敏感に反応してくださった研修会でした。ただ、ふと日本で考えてみるとどうでしょう。以前金井先生が「履修主義」のお話をされていて、今の日本は「どの子ども伸ばす」ことを求められているのでしょうか。こなすだけで終わってしまっていないか。今回の休校によりもつとそれに拍車がかかった印象さえ感じています。できないけど、落第制度もないのでそのまま「できなかったこと」は積もっていきます。そして、できないという事実だけでなく、そこから生まれた敗北感、そういうものの積み重ねを私たちはわかっているけど、次から次にやるべきことがあり、さかのぼりできていない、というのがどの学校でも起こっているのではないのでしょうか。

◆やりがい

「先生のための学校」でもお世話になった赤坂真二先生の最新刊「学級経営大全」を読みました。この本は「技術本」ではないので、いろんな考えを持ちながら読んでいたため、なかなか読み終えることができま

せん。そんな中、この「履修主義」とつながりがある部分を見つけてきました。

「今、先生方から奪われているのは、時間ではありません。他でもない、やりがいです。みなさんは、なぜ教師になったのでしょうか。いじめをなくしたいと思っ

て教師になった方もいるでしょうが、それは少数派で、多くの方は、授業がしくて教師になったのではないのでしょうか。更に言うと、ただ授業がしたいのではなく、授業を通じて達成感を感じたり子どもたちとつながったりしたかったのではないのでしょうか。」

が、今こそ教師の「自己肯定感」をあげる取り組みも意識する必要があるのでしょうか。

◆教師の自己肯定感アップ大作戦

一番は「声」です。保護者の方々の感想などで嬉しかったことは、必ずコピーしてノートに貼るようになっています。単純なことですが、とても励まされます。連絡帳に保護者の方が書かれることに、嫌なイメージを持つことも多いかもしれませんが、その中でもたまに嬉しいことがあればそこをコピーして持つておきます。私はそのノートを「おうちの人のラブレター」と題名をつけて大事にとっています。読み返すことはほとんどありませんが、ぬくもりを感じます。子どもの感想や「振り返り」でもそういう視点で常に見ています。

研修授業をした際にもらった感想でも子どものことが書かれていたらそれを子どもたちに伝えることも必ずしています。毎日意識的にほめることも大事です。しかしそれ以上に「承認」してもらっているという感覚がないと人間はやる気が出ません。子

どもでも教師でもそういう視点を大切に行っています。

3月の最後の日、子どもたちからたくさんメッセージを毎年もらっていました。その中で、一番心を打たれた内容は、やんちゃな男の子が書いてくれていた、「全部の授業が楽しかった、たくさんほめてくれたのがうれしかった」という言葉でした。一番手を焼いた男の子からこういうメッセージを最後の日にもらい、感激しましたしホッとしました。子どもと関係を作るということは、このように子どもを信じて地道に関係作りをする中で、その子どもの中にある、いいものを引き出す役目になることではないかと、その子どもから教えてもらいました。

赤坂真二先生が、以前講座で、つながるエネルギーの素とは、

「安心感・楽しさ・承認」

学力向上⇨意欲×質×量(時間)

意欲・・・やる気・雰囲気

と教えて下さりました。「承認」をキーワードに四月から「どの子も伸ばす」ことを核に頑張ります。

授業力・教師力の守破離 四月だから守らせたいこと

連載⑧

大阪教育サークルはやし 荒井 賢一

何かを守るためには

何かを捨てないといけない

「全てを救おうとすると破綻する」こともある。

今回の新型コロナウイルスの感染が止まる兆しがない。

致死率の低い伝染病ではあるが、既往症の人や高齢者は死に至ることもあるので、感染をできるだけ防ぐための対策が必要にはなってくる。

ただ、学校が休校になり、さまざまな施設が休館し、多くのイベントが中止になることで、多大な経済的な打撃を受けていることも確かである。

「経済より命が大切だ」という考えは、最もなことにはちがいない。

なぜなら、国民の命を守るのが国家であり、弱者を見捨てるといふ選択を取れば、それはもう民主国家とはいえないからだ。

しかし、経済が破綻することで、より多

くの命が奪われることもある。

我々の生活は、そもそも生きる上では不
必要なものであふれている。

お菓子であれ、宝飾品であれ、遊園地の
アトラクションであれ、別になくても人は
生きていける。

だが、これだけを多くの人口（人の口）
を自給自足するだけの田畑があるわけでは
ない。

それゆえ、生きることを彩る unnecessary
のを生み出すことで、多くの人の仕事は成
り立っているともいえる。

それゆえの危機を今、迎えているわけだ。

四月だから守らせたいこと

「4月の学級経営 これだけは外せない！
く授業を通して身に付けさせる10のポイ
ント」

コロナの影響で、中止になった講座の一
つのテーマである。

授業を通して、子どもたちに身に付けさせたいことの第一は、

「教師の指示通りに動ける。」

ようにさせることである。

教師が「全員起立」と言ったとき、「なんで立たないといけないの？」と言って立ちとうとしなかったり、「ノートに書きます」と言ったとき、プリントの裏に書いたりする子がいると、授業は成立しない。

もちろん、教師の理不尽な指示まで従う

必要はないが、四月の段階では、

「先生の指示は、みなさんを成長させるために出している」

ということを納得させながら、指示通りに動けるようにさせていかなければいけない。

ただ、この「指示通りに動ける」をゴリゴリ叱ってやらせるわけでない。

「すばやく指示通りに動けた子を取り上げ、ほめる」ということを通して、楽しくさせていく必要がある。

さらに、先生の指示通りに動いた方が、得だと思わせていく必要もある。

教師の指示通りに動いてみると、今までできなかったことができるようになった

り、分からなかったことが分かるようになっていたりするという体験が必要になる。
例えば、漢字も指書きから始めるとスツと覚えられた、というように。

教師が守るべき10のポイント

「教師の指示通り動ける」ことが、とても大切だが、そうさせるために、むしろ教師がどうすべきかで10のポイントを挙げてもいいだろう。

- ① 一時に一事で、指示する。
- ② 指示内容は易から難へとステップアップする。
- ③ 指示通りできたことをほめる。
- ④ 同じ指示をくり返す。
- ⑤ 指示する言葉を短くしていく。
- ⑥ 易の指示内容をやり直させろ。
- ⑦ 指示したことで達成感を持たせる。
- ⑧ 指示の趣旨を伝える。
- ⑨ ハンドサインでも指示する。
- ⑩ 教師の指示がなくても必要な行動が取れるようにしていく。

10のポイント以外に、教師の心構えというのもあるだろう。

例えば、「指示通りできない子に対してカリカリしない」とかである。

このようなことを模擬授業を通して、具体的に講座で伝えていこうと思っていた。

BCCKSで電子書籍づくり

例年の三月なら、学校の仕事以外に、学級開き・授業開きに向けての講座講師が数本あり、その準備に追われていた。

だが、今年はコロナの影響で、全てが中止になり、「何をしたらいいのか思いつかない」時間が増えてしまった。

そこで、現在絶版になっている『2つの発問で組み立てる授業』を電子書籍化しようと考えたのである。

最初は、一太郎で電子書籍化し、アマゾンのキンドルストアで販売できるように、手続きしようと思っていた。

しかし、一太郎でのリフロー形式変換がどうしてもうまくいかず、そこでストップしていた。(リフロー形式とは、文字の大

きさを自由に変更でき、それに合わせて、

一行の文字数や行数も変わる形式のこと。)

そんなある日、電子書籍及び紙の本の作成・公開・販売を行うことができるプラットフォーム「BCCKS (ブックス)」を見つけた。

このサイトを使うと、リフロー形式の本を割と簡単に作ることができる。

さらに、このサイトでは、作った本をキンドルストアで配信してくれるサービス(有料)がある。

キンドルストアへの配信には、税金や支払い処理などの複雑な手続きを必要とするのが、それをやってもらえるわけだ。

そして、一気に四冊の電子書籍を作ってしまったのである。

- (1) 『2つの発問で組み立てる授業』
- (2) 『授業づくり5つの心構えと指導法』
- (3) 『国語の授業づくりにおける5つの視点』
- (4) 『子どもが食らいつく道徳授業の組み立て方』

現在のアマゾンのキンドル本として、一冊五百円で販売中。ぜひ一読を。

学力実践とは何か ～源流から探る～④

「音読」指導のあり方(二)

学力研常任委員 深沢 英雄

一、仕上げの一斉読み

五番目は仕上げの一斉読みです。練習した成果を声で表します。みんなの声がきれいにそろい一つになることをめあてにします。句読点での間の取り方をきちんと指導しておく、クラス全員の声がみごとに揃います。

間違ったり、つまったりした時、声が小さい時などはストップをさせて、もう一度読ませます。間違いやすい箇所は連れ読みをします。

読み終わった後に評価を必ずするようにします。子どもが意欲的になるような言葉かけをしたいものです。

二、個人読み

一文を決めて、「今度は一人で読んでください。」と促します。ちゃんと間違えずにす

すら読めたなら、「すごい、くうまくなつたねさすが。」と過剰気味に褒めてやります。上手になったことを自覚します。練習のかがあつたと、自らの能力に自信を回復します。やる気の原動力が備わるのです。練習すれば伸びるといふ体験を積ませるのです。

三、暗唱

音読に自信を持つようになれば、暗唱に挑戦させます。暗唱は、書いてある文章を頭に記憶し、それを見ないで文章を声に出して唱えることです。連れ読みで練習した文でもかまいません。最初は短い量で始めます。いい文章を覚えることは、その内容をより深く理解できることであり、同時に自分が文を書くときの参考になり、何より長文を覚えられたという自信がより湧いて自分自身の力を見直すという利点があります。

す。

最初の二日間て全文を、連れ読み→一人読み→二人読み→一斉読みの順で十分に練習し、全員が滑らかに読めるようにします。授業の最初の十分は暗唱の練習にあてます。目をつぶってぶつぶつと言っている子、隣の子に聞いてもらっている子などさまざまです。そんな中で、「覚えてやるぞ」という雰囲気、クラスの中に高まってきます。

暗唱が苦手な子が多い時は、まずは、一文から覚えさせます。次に二文、三文と数を増やしていきます。家庭学習でしつかりと練習させます。子どもの実態に合わせて、スモールステップで指導します。

四、完璧読み

教科書がすらすら淀みなく読め、少し読み方に自信をもちかけてきたときを見計らって、完璧読みを練習させます。

(一)句読点では必ず句切って読む。(二)句読点のついてないところでは息継ぎはしない。(三)漢字は絶対に読み間違いをしない。(四)かながきの部分での読み間違いもだめです。この四点が合格の基準です。子

どもたちに分かりやすく示します。教師が間違いの例をやってみせます。不合格の基準があいまいだと不満がでます。初めての完璧読みの合格不合格の判断は教師がします。

会話のところでは、抑揚や節回しにも気をつけることです。段落では、適切な間合いを取らなければなりません。

完璧の意味については、子どもたちにも話をします。

『かんぺきという字を漢字で書くところで。璧(へき)は壁とは違います。下の部分は「玉」になっています。平らで真ん中に孔があいて宝の玉です。「傷のない玉」という意味です。みなさんも文章を一ヶ所も間違ふことなく読めるように練習しましょう。』

子どもの実態に応じて読む量は決めます。読み範囲は最初から無理をさせないことです。苦手な子が、どうしても合格せずに意欲をなくしてしまうからです。できる喜びを味わわせつつ、意欲を持たせながらの指導が大切です。

わずかの読みたがえもなしに、完璧に音

読させるには、相当の期間、何十回となく繰り返し練習させなければなりません。

一人ひとりを丁寧に評価してやるには、かなりの時間が必要です。授業だけではなく、休み時間、給食時間、放課後なども利用します。

二回目、三回目の完璧読みに慣れれば、教師が聞くだけでなく、友だち同士で練習させていきます。座席の隣どうしでお互いに評価させたり、最初の方だけ教師がテストをして、百点をとった子が小先生になり評価させます。

「厳しく聞いてあげることが、本当の友達思いなのです。」と話します。久保先生流に言うと、友だちの成長を願って厳しくする。それが「愛すること」です。

五、他教科にも音読を生かす

社会科・理科の教科書の記述は、高学年になると国語よりも難しくなります。一例をあげると、次のような文章が出てきます。「徳川家康は、朝鮮とねばり強く話し合い、豊臣秀吉が兵を送って以来とだえていた国交を回復させました。また、大名や商人に

海外に行くことを許可する許可状(朱印状)をあたえ、外国との貿易に力を入れました。」

こうした記述に対して、「考える力」を重視するあまりにか、基礎資料である教科書の読みがなおざりにされているくらいがあります。どの子にもきちんと内容を理解させるには、その基礎としての音読は、社会科の授業においてもやはり必要です。国語以外の教科でも、学習の基盤としての音読をもっと重視したいものです。

例えば理科では、社会科に比べると、教科書の記述の量はぐっと少なくなっています。観察や実験をもとに考えを深めていく教科ですから、当然のことですが、観察・実験そのものに力を入れるあまり、まとめが軽視されがちです。観察・実験のまとめをしたあと、繰り返し教科書の音読をさせます。

教科書の記述は学習のエッセンスだという観点から、ここでもなるべく暗唱させるようにします。音読の力がつくにしたがつて、子どもたちの学習に対する取り組みがしっかりとてきます。

「先生のための学校」誌上 開校

学力研 先生のための学校 校長 久保 齋 2020 4

先生のための学校の校長として、若い先生方に一番に伝えるべきこと、それは「何が自分を変えたのか」ということ、何が僕を学力研の教師に変えていったのか。ということだと思えます。

それをこの誌面を通し、過去の実践を通して何回かで伝えたいと思います。

何が私を変えたのか その1

私を心底「学力研の教師」にしてくれたのは、私が五十歳で赴任した新林の子どもたちでした。当時、子どもたちの荒れやキレが全国的に問題となる中、まさに荒れやキレのど真ん中の学校と行っても過言でない学校でした。

後にNHKの「NHKスペシャル」の取材を受けるのですが、その記者に「この学校の荒れが改善されれば全国の小学校の荒れはなくなる」と言わしめたような状態だ

ったのです。

その荒れた子どもたちが正に僕を心底「学力研の教師」に変えてくれたのです。

僕の中には偏見があつた

僕はそれまでも学力研の実践家として、実践を発表していましたが、それなりのこととはしていたと思います。しかし、新林の状況はそんなに甘くなかったのです。

そこで、僕の選択は2つしかなかったのです。

学力研の考えを信じて「読み書き計算」で子どもをきたえることに徹するか。それとも生徒指導に徹するか。

当時、茶髪、ルーズソックスは非行の代名詞のようなものでしたから、多くの学校、多くの教師はこの改善のために子どもたちの人権も無視して生徒指導を行うことが常となっていたのです。私も茶髪、ルーズソ

ックスはよしとは思っていなかったのですが、そんな偏見を一掃してくれたのが新林の子どもたちとの取り組みでした。

四月新しいクラスを持たれるにあたり、教師自身の中にある間違つた考え方、偏見を打ち破る一助として、新林の実践の中心の一文を参考にしてください。

教師の考えを打ち砕くような強烈な子どもに会えることは教師の成長に大きな苦悩ではあるけれど、それを乗り越えた時、大きな糧となると考えます。

以下「学力づくりで子どもが変わる」(子どもの未来社) p57からの引用

茶髪、ルーズソックスそれがどうした

私の学校、教室には茶髪やルーズソックスの子がたくさんいます。赴任したときはとても気になりました。茶髪やルーズソックスと俗にいう非行を結びつけて考えていたからです。しかし、〈読み・書き・計算〉〈話す・聞く〉の力を中心に子どもたちをきたえはじめると、それが誤りであり、偏見であつたことに気づきました。私にとつては、茶髪であろうがルーズソックスだろうが、自分をきたえることに真摯な態度を

示す子はみんないい子なのです。

そんなことに目くじらを立てているより、学校は学力をつけることにもっと専念すべきだと私は考えます。かりに茶髪やルーズソックスの問題を学校の課題、規則違反として扱うとなると、膨大なエネルギーがいるし、内面の自由との関係が生じて結論が出るはずがないのです。そんなことで子どもにいやな思いをさせたり、人権無視がましいの指導をして親とトラブルになったりする必要はまったくないし、それは教師の権能からの逸脱と考えるからです。

教師は教育し、学力をきたえることで子どもたちの人格の完成をめざすのであって、子どもたちの服装や持ち物を指導することで人格の完成をめざすものではありません。ましてやファッション感覚まで言及することとはあつてはならないのです。

くだらないことで子どもとの関係を悪くして、いったいなんの値打ちがあるのでしょうか。教師だつて、「白髪はみつともないから染めたら」とか「はげ頭は教師らしくないからかつらをかぶったら」なんて子どもや親からいわれたら、それだけで人間関

係が悪くなったり一生忘れないほど傷つくでしょう。そして「はげ頭でも教師はできる。ほつといてんか」といい返すでしょう。

口には出さないけれど、子どもも同じ思いをもったり、一生忘れないほど傷を受けているのです。そして茶髪について言及された子は「ほつといてくれ、茶髪でも勉強はできる。何が悪いんや」、きつと心の中でこういい返していることでしょう。

この「〇〇でも教師はできる」「〇〇でも勉強はできる」、これこそが学校の神髄なのではないかと私は思います。

学力研の原点とは何か

私は〈読み・書き・計算〉を徹底してきたえると、学力の基礎を培うだけでなく、子どもたちの学習意欲と自己肯定感を喚起させ、同時に荒れ、キレの問題をも解決できるのではないかとこの仮説を立てて実践に取り組んできました。それは〈読み書き計算〉をきたえることがたんに基礎・基本の技能をつけることにとどまらず、ヒトを人たらしめるのに欠くことのできない営みであると考えているからです。実際、実践的にこの仮説が正しいことに確信をもって

いました。〈読み・書き・計算〉をきたえていくと、子どもたちは自分に自信をもち、落ちついて授業に臨むようになるのです。

私たち教師は、子どもたちの教育を「生活指導」と「授業をおおしての学習指導」と、二元的にとらえがちです。しかし、学校生活の八割は授業です。授業のなかでこそ、子どもたちに自己肯定感を味わわせるべきだし、他者との協力や共感、ちがいを認めて人を大切にするなど市民的道徳を学ばせるべきなのだと考えました。

子どもたちは、訳のわからないことでほめられるのはよしとしません。ほめられるには理由が必要です。努力し成果が得られたときほめられて、はじめて自己肯定感が生まれます。そして、自分の意見をしっかりと述べ、友だちの意見をしっかりと聞き、真剣に学び合うなかで、実感として人を大切にすることを学んでいけるのです。そのためには、授業という場がいちばんふさわしいといえます。授業は、学力を高めるとともに、社会性をも高めていくのです。生徒指導の求めるものすべてを授業は内包しているといってもいいでしょう。

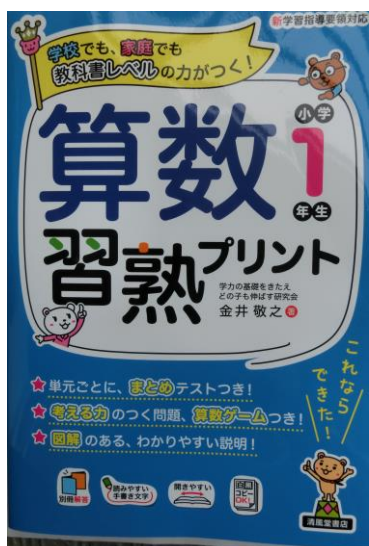
新「算数習熟プリント」B5版出版

金井 敬之

学力研総力編集

2020年の新学習指導要領実施に伴い、算数習熟プリントの改訂をすすめてきました。

学力研のメンバーが総力をあげて編集執筆しました（1年生は金井、2年生は深澤先生、3年生は岸本先生、4年生は図書先生、5年生は川岸先生、6年生は岡本先生、各学年の算数ゲームは、濱崎先生が担当しました）。



算数習熟プリントは、従来からスムーズステップとくり返し練習で子どもたちに力をつけることをコンセプトに多くの学校や家庭で使われてきました。

5つの特長

今回の改訂版ではさらに5つの特長が加えられています。

- ① 観点別に到達度や理解度がわかるようにした「まとめテスト」（知識・理解技能、数学的考え方の問題に分類をして、100点満点にしています。休業中の宿題やプレテストにも使えます）
- ② 算数の理解が進み、わかりやすさを考えた「考える力をつける問題」「算数ゲーム」（考える力をつける問題は、活用問題にも対応でき、算数ゲームは楽しみながら力がつく工夫をしています）
- ③ 理解をたすけるわかりやすい図解とイラスト（編集者の田邊さんがていねい

に仕上げてくださいました）

- ④ コピーや印刷するときにページ番号が「消える」（ページ番号を隠したり、消したりする必要がなくなりました。業界初です）

- ⑤ 取り外せる別冊解答（縮小した問題に赤字で解答を載せています。自分で答え合わせをすることもできます）

B5版に改訂しましたので、個人でお持ちになつて、職員室ご自身の机の上に置いて活用していただければと思います。さらに、B5版に引き続き、B4版も出版されますので、学校の教材プリントとして、今までのように使ってください。

算数の力をすべての子どもたちに

算数習熟プリントが多くの学校やクラスで使われることは、子どもたちの算数の力を高めることにつながります。学校現場が「学力テスト体制」になつて何年もたちますが、子どもたちの学力低下や学力格差がさらに広がっていると感じています。このプリントが子どもたちに役立つことを願っています。

局長たいり 4月

◇学力研最新情報

常任委員長 岸本 ひとみ

○未履修をどうするのか

3/2の午後から修了式までが臨時休校になった私の地域では、「未履修調査」が10日頃に届きました。添え書きには、未履修については次学年で履修するのが望ましいとありました。春休みの課題として、新学期に到達度テストをすればいいというような指示も含まれていたのには、啞然としてしまいました。これでは、学力格差が開くばかりです。

全国的にも、3年4年5年の算数で、未履修が出ていると予想しています。そこへ、新指導要領がやってきます。混乱の中で、学校内できちんと整理して、未履修部分の習得にまで至るかどうかは、疑問です。

いろいろ考えたのですが、これは帯タイムを使って、少しずつ習熟を図るしかないでしょう。1学期の間に、未履修部分の習得とまではいかないまでも、履修した状

態にまでもっていかなければ、学年が上がっていくに連れて、問題が大きくなっていくと考えています。私の学校では、今年度の研究教科は、英語。そして、「深い学び」を追究する授業とは、をテーマに決定していますが、その中で、未履修問題も取り上げていかざるを得ないと考えています。

こういうときに、とても助かるのが、学力研の出しているプリント集です。特に今回使おうと思っているのが「朝学プリント 低・中・高学年」の3冊シリーズと、「単元別まるわかりシリーズ」です。朝学の方は文字通り、帯タイム用ですし、単元別は未履修部分のみを、毎日少しずつ進めるのに適しています。新年度の職員図書として購入してもらう第一号になるかもしれません。

会員のみなさんの学校では、どのように対応されるのか、いいアイデアがあれば、ぜひ教えてください。と思っています。こういう時こそ、学力研の出番ですね。

◇事務局だより

事務局長 岡本 美穂

2月に石垣市の教育委員会主催の研修会に参加してきました。百名近くの参加者でした。その会の中心におられたのは学力研の会員の崎山先生です。同じ思いで子どものために奮闘されている先生方が全国におられます。そんな先生のお力に少しでも立ちたいと思っています。コロナの影響で、新学期の子どもたちは明らかに変化していることでしょう。今までに私たちが経験していない状態に日本中がなっています。卒業生からバトンをもらえなかった5年生に最高学年の自覚を持たせるのは大変なことです。また、長期休み一歩も外に出なかつたという子どももいるかもしれません。先生方も同じです。4月下旬に疲れが出てしまい、今まで以上に学級経営で苦勞される先生方が出てくるのではないのでしょうか。その時に寄り添えるように、この「学力研の広場」があります。ぜひ同僚などにもおすすめてあげてください。みなさんで危機を乗り越えましょう。

◇4月におすすめて

副委員長 図書 啓展

新型コロナウイルスの状況下で、学力研の集会や講座を中止・延期せざるを得なくなり申し訳ありませんでした。その中で、新年度がスタートしました。子どもたちとの出会い・学期初めの学級・授業づくりはいかがですか。

子どもたちも先生も、キラキラ輝く一年間とするために、4月は踏ん張りどきですね。「学力づくりで学級づくりを」の視点を持ちながら、生活や学習のシステム・ルール確立を目指したいものです。

「**図解 授業・学級経営に成功する〇年生の基礎学力**」(1年〜6年、フォーラム・A)は何月にもどんなことをすればいいか、よくわかります。おススメです。

●算数習熟プリントの活用を

学力研定番の算数習熟プリントも新版ができました。印刷の時にページの数字を消さなくてもいい工夫や、考える問題・楽しいページも入り、バージョンアップしています。ぜひ学校での購入も含早めて普及・活用をお願いします。子どもたちに早く届けたいです！